

# 研究所だより

第396号  
2019年 1月10日  
発行：土佐清水市教育研究所  
TEL 82-3015



“年の始めの例(ためし)とて 終(おわり)なき世のめでたさを  
松竹(まつたけ)たてて 門ごとに 祝(いお)う今日こそ 楽しけれ”

『一月一日』 1893(明治26)年 日本の唱歌



## 2019年 迎春

### 本年も宜しくお願い致します!

穏やかな正月、松の内もあつという間に過ぎました。暦の上では6日は「小寒」。この日から「寒の入り」となり、節分までが「寒の内」と呼ばれ、厳しい寒さになります。健康に留意して過ごしましょう。

各校では3学期が始まり、子どもたちも教師も夢や目標を持ち、希望に燃え、やる気に満ちあふれているのではないのでしょうか。

.....  
(ぎょうせい リーダーズ・ライブラリ Vol.9 から)

### ～元不登校「引きこもり」から考える不登校への新たな取組と課題～

論考：富田 富士也 氏(子ども家庭教育フォーラム代表)

「学校」がなければ「不登校」は存在しません。

だから「不登校ゼロ」にするには「学校」をなくせばいいのですが、それではどの子にも保障された同世代との生活空間がなくなります。

そこで「学校」という存在の最も大切な役割を平たく考えておきたいものです。

#### 在宅化する不登校その後の子どもたち

「平成」という時代の中で顕在化した社会現象の一つに、成人した若者の「引きこもり」があります。そして国は「8050」問題と名付け、引きこもり状態の長期・高齢化、さらには親子の自立を啓発しています。すでに全国規模の家族会も組織され、国とともに医療・福祉面からの実態把握、政策も検討されつつあると聞きます。「80」とは親、「50」とは子の年齢を象徴的に表したもので、関係者の中には、「引きこもり」と呼ばなくても「8050」で同義語にしている状況すらあります。つまり、「高齢化した引きこもり」の略称です。

さらに、この「8050」化している子のかなりの層が昭和から平成に変わるころには20歳前後の「元登校拒否児」として学校や職場といった仲間集団に居場所を見つけられず「在宅」の身にあり、社会の谷間に置き去り状態にあったのです。

一方、同時進行で増え続ける登校拒否は国民的テーマになり、学齢期を過ぎた「元登校拒否児・者」への援助の手を差し伸べる余裕もなく意識も希薄で教育的働きかけはあまり見当たりませんでした。

また、学齢期中の登校拒否児の呼び名を柔らかく「不登校」に変えてもその数は子どもの数が減っていても増えました。「学校復帰」の指導も行き詰まり、教育行政は子ども

への人権にも配慮し、不登校中の「在宅」に寛容になっていったと思います。こうして「在宅」のまま親子で一日を過ごす子どもや若者が同世代から置き去りになったまま増えていったのが「平成」の世でした。

あわせて高校には入ったものの同世代との学園生活に生きにくさを感じた生徒たちが「高校中退」から「在宅」という選択をし出したのも「平成」です。同時に、大学卒業を拒否して留年し続けたり、就職しても早期に退職し、「在宅」する学生・若者も出て、親のライフプランを困惑させ始めました。こうして「何の苦労もなく在宅する」若者としてマスコミも「物珍しさ」で取り上げたりするようになっていきました。

人間関係のわずらわしさを除いた通信制高校、単位制高校も注目されましたが、そこでは“同世代復帰”は難儀だったようです。また、「無職」が「フリーター」と呼ばれるようになって、そのことで「在宅」から一歩踏み出して仲間集団になじんでいくとは必ずしもなりませんでした。

#### 昭和に生きた親と平成に育った子の確執

昭和という時代を人と交流することで生活の糧を得てきた親と、「在宅」していても衣食住には困らない子が、互いの存在を肯定して何年間も暮らすということはよほどの察し合う事情でもない限り難しいことです。そんな関係の中で精神的緊張感(ストレス)を、それでも人と接してきて吐き出す術をもっている親は“ガス抜き”もできますが、長期にわたって自ら他者、特に同世代との接触を避けてきた子には緊張感は臨界点を越えたりします。そこで起きるのが家庭内暴力であったり、精神症状の類です。もう不登校云々ではないのです。

「在宅」する子をもつ親にとって、この喫緊の家庭問題を解決してくれる支援者は“救いの神さま”となります。それが「在宅」の子を「怠け」「根性なし」と部屋から強引に引きずり出してしかるべき施設に入所させる方法であったり、強制的に入院させて“治療”の対象とすることだったのです。

不登校のこれからを模索するにあたっては、「平成」の時代を「在宅」し「不登校その後」を生きてきた「引きこもり」の声を改めて聞いておく必要があると私は思います。仮に不登校であっても、人を拒否することなく、いずれ仲間集団になじんでいければそれで問題はないのです。

#### 万策尽きたか“不登校対策”

先述したように、「学校」という仲間集団がなければ「不登校」「登校拒否」は存在しません。そして仲間集団とは「同一世代と同一時代を同一空間」で生活する営みです。

だから、不登校する子の「学校復帰」を個別に考えるときは、その仲間集団における人間関係に思いを馳せるわけです。人に遠慮したりすることなく自分の意のままに周りの人と関係ができるということは、よほど他者を惹きつける能力でもない限り不可能です。だから、なるべくプライドで心に鎧を着ける必要のないうちに仲間集団における人間関係の折り合いを学んでほしいものです。

学校復帰が叶わなかった子どもたちに向けては「フリースクール」、無就労の若者には「フリースペース」「生活共同体」が“居場所”として各地に誕生してきました。その活動の中心的テーマは仲間集団における人間関係の学びです。そして、教育行政もついに民間企業の参入も含めて「フリースクール」の公認に夜間中学の設立と併せて踏み出しました。2017年施行のいわゆる教育機会確保法です。

私も昭和から平成にかけて数十年間、登校拒否に悩む親子と「親の会」「フリースペース」「カウンセリング(個別・家庭訪問)」を通して接してきました。中でも「不登校その後」から「在宅」し“閉じこもり”状態にあった子どもや若者を家庭訪問することに励んで来ました。怠け者、対人恐怖、中には家族から「ならずもの」と言われていた若者もいました。



## 引きこもって語れた不登校の胸の内

「生活の糧」として昭和時代に働くことで仲間集団を学んできた私には、思春期・青年期を「在宅」し続けている彼らに対して、不思議さから関心をもったのです。関心を持ち、そこから本音をこぼしてもらうには共感的な聞き方が肝要です。納得していく同感的聞き方では私の自我がどうしても出てしまいます。私の納得は度外視して、あくまでも「在宅にならざるを得ない」心情を絶対的に肯定して言葉を繰り返すのです。その中でつぶやかれた数々の繊細な言葉に私は惹かれました。それは、小・中学生の不登校時代には表現できないディテールで、親や先生には相手にされない気持ちだったのかもしれないのです。家庭訪問し対話する中で彼らは言います。

「心では登校拒否をしていません。人とふれあいたいのにならぬのです。だから友達とふれあいたいと思ったときから悩み出したのです。どんな人ともふれあいたいのです。」

平成に生きた彼らにとって、「ふれあう」ことは子ども時代を「昭和」で育った親や先生が「慣れだよ」と言うほど気楽なことではなかったのです。



別の青年はこう表現します。

「中学で人間関係に襲われた僕は、勉強という“安全地帯”に逃げ込んだ。勉強さえしていれば親も先生も何も心配しなかった。家でも学校でも話したり聞いたりしてくれる人もいなくなっていく」

この若者は高校中退後、大検に合格し大学に進学しましたが、以来、「在宅」の身でした。通学への意識がいつの間にか「学力向上」に変わり、その中で先生も代わり、仲間から孤立していく子どもの悩みは“死角”になっていったのでしょうか。その意味で、登校拒否、不登校は仲間集団からの孤立から抜け出し、再び友とふれあうことへのもがきのサインだったとも言えるのです。

ただ子どもへの「個性化」が進み、そのことによって「個性」が「孤立」を強化していった気がします。

さらに、昭和の高度経済成長、中流意識の広がりとともに、私たちは生活の豊かさと引き換えに人間関係の希薄化を招いたようです。すでに平成時代にあっては、人間関係が日暮らしの中で当たり前にならぬものではなく学ぶものになっていったのです。子どもたちはその危惧を「ふれあいたいのにならぬ」と不登校を呻吟していたのではないのでしょうか。そして今人間関係は“人工的”に“アクティブ・ラーニング”する時代となっているのです。

私は、仲間集団から離れて「在宅」する子どもや若者との相談活動を通して、「人とふれあいたいのにならぬ」コミュニケーション不全の状態を「引きこもり」とネーミングして問題提起（『引きこもりからの旅立ち』ハート出版、1992年）しました。

提起することで“現役”の不登校との出会いも増え、こんな胸の内を次々と聞きました。

「一人称ならいいけど二人称、三人称の人間関係を強制されるとつらい」

「立ち居振る舞いのTPOが分からなかった」

「緊張しているだけなのに難しい顔をしているとか、人嫌いな子と思われていた」

ネットでの交流はできるけれど対面し肉声で対話することへのしんどさ。コミュニケーションスキルを意識し過ぎて間がとれない切なさ。表面的な付き合いへの戸惑い。不登校をきっかけに対人関係への機能障害を起こしている苦しさ伝わってきます。

こうした関係性の喪失は他者に対する共感性（無条件の思いやり、察する）の欠如となり、関係の中で自己肯定感（存在しているだけで尊い）を実感できないのです。成果や評価あつての自己満足感と人間の尊厳としての自己肯定感とは違います。自己肯定感の危

うい成績優秀者は多く、プライドとコンプレックスの裏表に悩んでいたりします。

## 積み残されていく課題

今や社会病理ともいえるコミュニケーション機能不全を背景に生起する不登校への対応は、学校・家庭だけで機能回復できるものではありませんが、やはり家庭が柱です。

文部科学省が平成29年度の小中学生の不登校といじめについて「過去最多」と発表しました。その中で、小学生の増加や低年齢化、ネットいじめの深刻化が取り上げられています。

不登校に対する公的機関の相談体制はとても充実してきたと思います。「どの子にも起こる不登校」の事情からでしょうか。そして「学校復帰」にこだわることなく「学校以外」の場での学びを法の整備とともに積極的に提案しているようです。国家として「学校」という空間での不登校に音をあげた気もします。こうした積み残された課題にどう取り組んだらいいのか、そこにわずかでも希望があれば国民的テーマとしての不登校問題は消えていく時代を迎えるかもしれないのです。

そこで、政治的・経済的な要素もうかがえる「働き方改革」を庶民的な「暮らし方改革」に意識を変え、最も小さな仲間集団としての「家庭」に不登校の取組への希望をもちたいのです。

人が集団にあつて、「自分もこの仲間の一人だ」と優劣に関係なく肯定的に実感できるのは「けんかして仲直り」の繰り返しからです。けんかしたら決裂だ、自分を譲ったら敗北だという考えや感じ方を身に付けたら人とつながることへの信頼感は育ちません。孤立したときにひとまず相手を信頼するという率直に甘える姿勢はその人の命にかかわることです。子どもにとってその身近なモデルは親です。「子どもは親の背中を見て育つ」という諺もあります。「背中」とは「人間関係づくり」です。子を巻き込み背で語るのです。

## 不登校が実感したい関係づくり

まず家庭に「けんか」できて「ゆるせる」関係をつくることです。そして、必ず「仲直り」まで辿りつく“努力”を、親子で家族でしましょう。とても手間がかかります。この互いに共感し「仲直り」までにもっていくプロセスを「無駄な時間」と省いたり、合理的に効率的に“処理”してきたことがコミュニケーションの機能不全としての不登校、引きこもりの背景にあると思うのです。夫婦・親子げんかをあえて巻き起こすのです。しかし、「お互いさま」と時間をかけて手を取るまで関係を投げ出さないことです。

教員も含め、私たちのような不登校、引きこもりの切なさに気づかされた大人が、まず身近な家庭から「せめぎ合って、折り合って、お互いさま」の肉声の対話を意識して実践し、さらに地縁、職縁にまで視野を広げて国民的暮らし方改革にできたらと思います。

## ☆書籍の紹介☆

○ リーダーズ・ライブラリ Vol.9

「子供の危機管理～いじめ・不登校・虐待・暴力にどう向き合うか～」(ぎょう)

お知らせ



<各部会、研究協力校、各校、へき地・複式教育研究会（小学校部会・校長部会）>

「清水の教育」研究集録原稿締切：1月28日（月）